



みんな
いらっしゃ〜い！
ここが茶OH!です。

ちゃお 茶OH! ってな〜に？

大和市の協働事業「ふくしの手全員集合」の活動の一環です。地域の交流を深める目的で、お茶を飲みながら世間話、子育ての話、健康の話など、気楽におしゃべりをしながら交流を広げ、地域の絆を深めています。昔の縁側のような居場所です。

湘南ブルーの旗が出ていたら、そこは茶OH!です。

赤ちゃんからおじいちゃん、おばあちゃん、男も女も、障害のある人も、お金の無い人も 無き人も み〜んな来てね。



お茶を飲みながら、ひと時、時間を共有しませんか？
そばに誰か居るだけでホットできる。

お知り合いになれたら、外で会って「こんにちは」って言えるでしょう。

散歩している時、知り合いに会えたら、ホントうれし〜い。

そんな輪、つながりがたくさんできたら、うれし〜い。

近場で支えあいの輪ができると、うれし〜い。

やさしさの輪ができると、うれし〜い。

あたたかさの輪ができると、うれし〜い。

情報共有でき、ネットワークでつながり、おたがいさまの支え合いを作りましょう。

ご近所に茶 OH!ありませんか？

やってみませんか？（「ワーコレ想」茶 OH!担当 石原啓子）



「ふくしの手全員集合」は

- ・「ワーカーズ・コレクティブ想」
- ・「パパボラやまと」
- ・社会福祉法人「敬愛会」
- ・市・健康福祉総務課

が手を取り合って、協働事業を行っています。

お互いの助け合いが子育て支援の基本

ファミリーサポートセンター事業を受託 NPO 法人 ワーカーズ・コレクティブ チャイルドケア

理事長 永井圭子

「子どもたちがたくさん大人の可愛がられてゆったりと育つことができるように、親だけに子育てを負わせないで周りが支えていかれるように、自分の経験と時間を少しひとのために使うことで次代を担う子どもたちが健やかに育ってくれることを願って活動します。」これがチャイルドケア設立の趣旨です。2000年設立以来、その思いを大切にしながら活動してきました。昨年10月より大和市ファミリーサポートセンター（ファミサポ）事業を受託したことで、今までのメイン事業だった子育てサポート利用会員の方々の多くがファミサポ依頼会員に移行しました。現在はファミサポで受けられない3か月未満のお子さんや、塾・お稽古に関するサポート、市外在住の家庭へのサポートには、チャイルドケアの独自事業である子育てサポートで対応しています。支援内容は、お子さんの送迎・預かり、産後の家事支援などです。

2007年から大和市つどいの広場事業「こどもーる」を受託して、月曜から金曜の毎日10時〜夕方6時まで、イオンつきみ野で広場を運営しています。



毎日100人以上の親子が遊びに来たり、時にはアドバイザーが相談に乗ったり、楽しい場です。広場といえば、チャイルドケア独自でも0歳児を対象にした「ちやいど広場」事業を開催しています。毎月1回、施設の部屋をお借りしてベビーヨガや、アロママッサージなどで楽しんだ後、手作りお菓子とお茶でお母さんどうしのおしゃべりに花が咲きます。

2006年からは、養育支援訪問事業を受託し、市が必要と判断した家庭への支援にも入っています。また、病気や障害を持った方々にも少しでも寄り添っていきたく思います。今年度は、ほかにも「タッチコミュニケーションプログラム」という、親子の身体接触を通して母子関係を修復していくプログラムを研究されている講師を招きスタートできたことは、チャイルドケアの活動に厚みが増してきた実感があります。一人一人のメンバーが、これからも、お母さんお父さんたちの気持ちに寄り添って活動していけたら、子育て支援の輪が地域に広がっていくと信じています。

きたことは、チャイルドケアの活動に厚みが増してきた実感があります。一人一人のメンバーが、これからも、お母さんお父さんたちの気持ちに寄り添って活動していけたら、子育て支援の輪が地域に広がっていくと信じています。

「センター」のある日ある時

1月14日(土)晴れ

「チームピース チャレンジャー」の蔵田さんが、「おりがみサークル」の皆さんが折った折り紙を、インドの子どもたちに届けたときの様子を話してくれました。節分の鬼、ひな祭りの人形、5月の節句の兜などの折り紙を手に、日本の四季折々の行事、文化などを説明したとのこと。蔵田さんたちスタッフがインドの子どもたちと駒や鶴をいっしょに折り、よいクリスマスプレゼントになったそうです。(S・S)

ボランティアバスが「センター」にやってきます

ボランティア見学会が実施されます。ボランティアを必要としている団体は、当日「センター」にいらしてください。活動のPRをしてボランティアさんをGETするチャンスです。

日時:3月15日(木)14:30~15:30

*事前にセンターに申込んでください。



いろいろな“モヤモヤ”を聞きました

1/26(木) 第(49)回連続共育セミナーを開催しました



「NPOで働くということ」PART1 ～言いたくても 言えない モヤモヤ～ 話し手は関根孝子さん

NPO 法人の説明から広くボランティア活動の話となった。日頃気になること、そして“モヤモヤ”などの感じ方、各自の色々な考え方が聞けたセミナーでした。“モヤモヤ”は「動機づけ」や「達成感」の精神的なもの、「雇用契約」や「評価報酬」などの金銭的なもの、「履歴・背景」や「作業環境」などの属性的なものなどがあり、活発な意見交換がありました。「私の所は、こんな問題があって…」「私はこう考えますが…」など、とても具体的で分かり易く聞きました。そして考えさせられました。調査によると、NPO 選択理由は「目的・活動内容に共感」、評価価値「達成感・充実感を得られる」が一番多く、活動を通じて「自分の役割」「仲間作り」「地域社会づくり」など、担い手としての自負が

生まれていました。でも“モヤモヤ”について、いざ話し出すと「雇用条件」「報酬」「労働基準局」「税制」や「評価金額の平等性」など、大半は金銭面に及びました。すばらしい“本音のセミナー”だったと思います。「就職する時、ボランティア団体に就職できますか？生活維持ができる団体ですか？」とても印象的な言葉でした。そこで手を挙げて発言した次回講師の杉下さんが“収支バランスのとれたNPO”についての前向きな意見。2月23日(木)が楽しみになってきました。退職後の「環境の違い」「組織の違い」「手当の違い」「責任感の違い」などを、“NPOだから”で勝手に判断していた気がしました。カルチャー・ショックからの逃げの様な気もしてきました。これからも、もっと市民活動は「継続」を重視して、“モヤモヤ”に接して行かなくてはと思います。さて、大和市民活動センターですが、クルー(漕手)の足りない、コックス(舵手)ばかりの“モヤモヤ”です。(N. M)

次回 第(50)回連続共育セミナーは

「NPOで働くということ」PART2
～モヤモヤを減らしてスッキリ活動しよう！～
日時：2月23日(木)18:00～20:00
場所：大和市民活動センター会議室
話し手：杉下由輝(ゆうき)さん
「さがみの国大和フィルムコミッション」副会長



PART1に参加して、いろいろなモヤモヤを聞き、ヒントを少し話しましたが、次回は具体的な解決策を持って行きます。

今年も大和駅プラットフォームで仲良くなろう！

～ やまと国際交流フェスティバル ～

3/18(日)10:00～15:00

大和市民活動センターは、今年も駅前ブースで、大学生・高校生を中心にアイデアいっぱいの企画で参加します。

第7回やまと国際交流フェスティバル(主催:財団法人大和市国際化協会)は多くの外国籍の人たちが参加する“インターナショナルなお祭り”です。20以上のブースが出店。ステージでは民族舞踊をはじめ、いろいろなパフォーマンスが繰り広げられます。



写真を撮るとき、
「はい！チーズ」は日本。では、外国では？



「センター」のある日ある時

1月18日(水)晴れ

センター室内看板を窓際に移したら、意外な効果が出てきてビックリ。まず、スペースが広く見えます。また、温風が看板にぶつかり、下の業務机、特に足元が暖かくなりました。そして照明の遮蔽が無くなり、明るくなりました。何よりも改めて“活かそう！ひろがりのわ つながりの手”を読み直したことです。この看板は、当初からじっとセンターでの皆さんの出会いや交流を見てきたんですね。



大和市民活動センター[拠点やまと]が制作発行する
月刊広報紙「あの手 この手」。
2月号(第55号)をお届けします。

その石碑にはこう記されていた。

「一 不時の津浪に不断の用意 一 地震の後どんとなつたら津浪と思へ 一 大津浪三四十年後に又来る 一 津浪来たなら直ぐ逃げろ 一 金品より生命」。(東京新聞 1/16 付「碑に学ぶ」より)

岩手県陸前高田市気仙町湊地区、海岸から 350m 離れたところに立っていた石碑だ。建立されたのは 1933 年(昭和 8 年)。三陸大津波があった翌年。今からほぼ 80 年前のことになる。しかし、去年 3 月 11 日のあの大津波で流されてしまい、その後埋没しているのが見つかった。

この悲惨な経験を後世に伝えておきたい。もう 2 度とこの悲劇を繰り返してはならぬという、かつてそこに住んだ人たちの切なる思い、忠告がその石碑(いしぶみ)に刻まれている。

この 1 月の中旬、私は東日本大震災では甚大な被災を蒙った岩手県にあって、幸い内陸に所在したため被災を免れた岩手県立図書館(盛岡市)を訪ねることができた。

「図書館というのは、単に本を貸し出すところというようなことではなく、正に『知のインフラ』だということを今回の震災で改めて気付かされています。図書館とは、ひとつにその町の実にさまざまな資料が保存、管理運用されているところなのです」と、係りの方から伺う。「例えば、県内の陸前高田市立図書館はスタッフが全員行方不明、または死亡。そして、この図書館に保存されていた町の資料をことごとく津波で失ってしまいました。それで今、その市の行政を機能させていくうえで、著しい障害を生じているのです」と。

冒頭に書いたように、私たちの祖先は震災の記憶が途切れないよう、例えば石碑に「戒(いましめ)」を刻んだ。

今回の東日本大震災について、新聞や雑誌などでの紙媒体はもちろんのこと、ラジオ、テレビ等の放送媒体、電子媒体などで膨大な「記録」が残され、更新されつつある。それらの「記録」を収集し、再構築して、時事情報の提供、地域資料収集の要(かなめ)として、また千年後の子孫に伝え残す取り組みとして、岩手県立図書館は「震災の記録を図書館にご寄贈ください」というアクションを開始していた。

記・小杉皓男[拠点やまと]広報係 2012/1/30



イラスト・望月則男